することができる.

29) 藤原定家の歯病に関する考察

On the Dental Diseases of Sadaie Fujiwara

鶴見大学　戸出　一郎
別部　智司
佐藤　恭道
森田　　武
雨宮　義弘

Ichiro Tode, Satoshi Beppu, Yasumichi Sato, Takeshi Morita and Yoshihiro Amemiya, Tsurumi University, School of Dental Medicine

藤原定家は応保2年(1162年)，藤原俊成の子として京に生れた．18歳の時，内昇殿を許され，以後60年間，高倉・後白河・後鳥羽帝に仕えた．

定家の日記「明月記」は，治承4年（1180年）から嘉禎元年（1235年）までのものが現存している．

「明月記」には政治・公事典章から人情風俗に至る公私の問題と共に，定家とその家族の生活が詳しく記録されている．

「明月記」によれば，定家は少年時代に大病を患い，それ以後病が絶えず，呼吸器・消化器・泌尿器・皮膚・眼・口腔等の疾患や，身体痛・風熱病・寒病・発り等の症状に悩まされ，更に心神悩・病気不快・所労等の言葉で表現される病感の訴えが700回以上も見出される．拙論では，この中で口腔に関する疾患のみを選び出し，定家が患った歯牙疾患について考察を試みた．

歯病に関する最初の記録は，43歳の元久元年3月24日，「歯痛む．雨降り，心神冷然たり．出仕せず」とある．

建暦2年8月22日，51歳の時，「歯取の老嫗を喚び，歯を取らしむ」とあり，翌建保元年4月15日から歯を病み，18日には「歯の病，日を逐いて堪え難し．老嫗（先年度々來る）を召しに遣し，折れたる歯を取らしめ了んぬ．根を穿ち取らんと欲すと雖も取り得ず，大なる苦痛堪え難し．終日痛む．使を以て清成朝臣に問う．この事驚くべからず．漸々に減ずべき由，示し送る」とある．当時残根の抜歯を曲りなりにもなし得たこと，和気清成が抜歯後疼痛の予後をよく洞察していたことは注目に値する．

60歳台になると歯病の記録が急に増えてくる．嘉禄元年12月30日，64歳の時，「去年より霜葉の如く揺れ落ちんと欲するの或歯，遂に抜け落ち了んぬ．その跡すでに愈ゆるが如く，血の気なし．暮齢の然らしむ．何をかなさんや．（この所，奇とせず．これを取りて京に歸るべきなり）」とある．これは重度の慢性辺縁性歯周炎の症状と思われる．

寛喜2年4月4日，69歳の時，「源氏を書くの間，口熱おこり歯痛む．朽歯極めて弱し．苧を付けて少年嬰兒の如く引き落し了んぬ」とある．これも前例と同じく歯牙が弛緩動揺していたのであろう．

その他，顔面の発熱腫脹を訴える記事が多く見出される．その中には面疔によるものが2，3あるが，大部分は歯牙に起因する熱腫である．その場合，歯肉或は顔面に蛭を吸着させて瀉血をし，歯肉に膿瘍を形成した場合には鍼により排膿している．

蛭による瀉血は屢々行われ，かなり効果があったようで，定家自身，天福元年4月8日「未時許りに蛭を飼う，頤下，年來頻りにこれを好む」と述べている．

「明月記」における上述の記録を総合して，藤原定家は60歳台以後，慢性辺縁性歯周炎に罹患していたものと推測する．

30) 歯科医史からみた古事記

大阪市　杉本　茂春

1

古文の歯は周代の遊牧民によって造られ，猛獣，獅虎の口歯を象形したが，漢字の歯は殷代に造られ，人の口中の歯を象形した．

後世，組織的に整備されて現在の歯となり，我が国では独自の訓みで，fa, ha と発音した．

一方，古事記は西紀681年ごろ提唱され，和銅年間（711～712）に成立した．この時期，齒八はまだない．

2

古事記上巻，神代，長途の旅路をつかさどる神，「道之長乳歯神」という神の名の由来はつまびらかではないが，渡り鳥の燕が長い旅路を終え，巣造り，子育にはげむ姿にあこがれた古代人の願望がみえている．古事記の撰者，太安万侶は，漢字の歯を知っていた．

3

中巻，神武記，東征の条，歌謡(10)，宇陀の「久治良」について，従来，鯨または「クチ」（鷹）らとする説があるが，古代インド語・パーリー語等にみえるクシラ・クチラ・クジラ・クヂラと聞こえるホトトギスであることがわかった．

瞿翅羅・倶翅羅・拘翅羅・拘尸羅・拘枳羅・瞿枳羅・倶枳羅・倶耆羅・居枳羅・拘耆羅・鴝鵒羅・拘翅・拘枳・鵒鵒・鵒鵒，等仏典によっていろいろの音写がなされている．

古代インド語の漢音写の訛りによって，各種各様の漢字が用いられたにすぎない．

神武東征が，いつの時代に行われたかはつまびらかではないが，少なくとも正規のルートで仏教が伝来する以前に，吉野・宇陀地方の土豪たちのあいだに，パーリー語が流通していたことがわかった．

4

中巻，応神記，歌謡(43)，歯並みと訓みならわした原文，「波那美」は，さきに歯を「は」と訓むことを知っている太安万侶が歯並みとせず，なぜ波那美としたか疑問である．

5

下巻，仁徳記，履中記，反正記中，歯にまつわる異常な関心は古代新羅王制をふまえていたと考えられる．

6

下巻，安康記，賤の老媼とインド伝承医学とのかかわりについて，老媼の所作はアーユルヴェーダ（生命の科学）の中のスシュルタ（外科学）大地原訳・伊東訳本の記事に対応していて，古代インドの初期仏教が独自の伝道径路で伝わっていたことがあきらかとなった．

7

下巻，顕宗記，置目の老媼の検証は，法歯学的検索の好例である．

8

古事記は，原文を漢字学的に検証することによって，日本民族論，文化人類学の宝庫であることがわかってきた．

31)「群馬県下に残る道了様信仰と福岡県下に残る道了神社信仰の接点と考察」

A Comparative Study on Faith in Doryosama Gunma Prefecture & Doryo Shrine Fukuoka Prefecture

池園歯科研究会　○湯浅　髙行
藤野　珦男
小林一日出
日本歯科大学　屋代　正幸

Takayuki Yuasa, Yoshio Fujino and Kazuhide Kobayashi, Ikezono dental research group
Masayuki Yashiro, The Nippon Dental University

群馬県の郡部には，疾病に対する民間信仰が，細々とではあるがいまだに伝承されている地域がある．県下東部山田郡大間々町の渡良瀬川畔に，『子どもの守り神道了様』という小堂があると，山田郡誌に記載がある．郡誌によると，このご本尊は道了様といい，子どもの守り神であると同時に歯痛の時にも効験があるとされ，「齲歯に悩める者は治る様拗ねた心の子供はすなほなれかしとお願をかける時は霊験あらたかなり，大願成就すれば御禮としてねじり木を奉納す．」と記されている．

演者らは，現地調査を行ったがその堂はすでになく，土台石と奉納台が残るばかりだったが，その奉納台にはねじれた木々がたくさん奉納されており，現在でも子どもたちの健やかな成長を願ってねじれた木を奉納するという厚い信仰が残っていることを確認した．

一方，福岡県柳川市に近接する山門郡三橋町の三柱神社の境内にも，通称『熱の神様』とよばれている道了神社が存在することを知り得た．神社側の由来によるとこの祭神は，「神武創業の武将にしてその功績史上著し．本社の由来は悪疫退散，平安祈願の為め相州箱根より遷し祀れるものと伝